

松森胤保の著作にみる動物観に関する研究

—動物の飼育愛玩に関する記録から—

Study about View of Animals in Writing Works by Matsumori Taneyasu:
Domesticating Pet Animals and Collecting Animals.

安田 容子
Yoko Yasuda

キーワード： 松森胤保、 博物学、 歴史資料
keywords： Matsumori Taneyasu, natural history, historical materials,

1. はじめに

松森胤保 (1825~1892) は、庄内地方の科学者として注目を集める人物である¹⁾。庄内地方の動植物についての詳細な図譜である『両羽博物図譜』(山形県指定文化財)を単独で執筆しており、その他にも蒐集記録や発明、実験の記録、動植物の分類などについての知見についての膨大な記録を書き残している。文政 8 年 (1825) 6 月 21 日に長崎市右衛門の長男として、鶴岡に生まれた胤保 (俗名は長坂欣之助、後に右近之助) は、安政 3 年 (1856) には藩校である致道館の助教に就任する²⁾。文久 2 年 (1862) に家督を継ぐと、翌文久 3 年には、庄内藩の支藩である松山藩の家老に任ぜられた。ものの蒐集や鳥類の飼育は幼いころより行っていたが、松山を拠点にしていた文久 3 年 (1863) から明治 12 年 (1879) 頃の間、精力的にものの収集を行っている。その間、元治元年 (1864) には江戸詰を命じられており、この期間においても、江戸において様々なものや情報を収集しており、慶應 2 年 (1866) に筆写された『遊覧記』巻二には、江戸で見聞した珍品や奇品が記録されている。

慶應 4 年 (1868) には、松山藩の軍務総裁となり、松山藩兵を率いて秋田攻めを行う活躍をしている。明治になり、松山藩が松嶺藩と改められると、明治 3 年 (1870) に松嶺藩の大参事に任ぜられた。明治 12 年には鶴岡に戻り、山形県会議員なども務めていた。一方、公務だけで

なく、個人的に好む活動も精力的に行っており、松山在中においては、『家蔵五玩雑録』や『畜養録』など、蒐集や飼育に関する記録を書き留めている。明治 16 年 (1882) に一切の公職を辞して後は執筆活動に専念するようになり、生涯の内に、代表作『両羽博物図譜』59 冊をはじめ、500 冊をこえる著作をのこしている。彼の著作の内容は、家のことから、戊辰戦争中の記録、旅行記などのほかに、蒐集した古物の記録、自ら発明した機械についての解説や科学に関する随筆、漢詩や戯作にいたるまで多岐にわたる。

本研究では、松森胤保の動物飼育について、『百年間談』、『南郊開物径歴』を中心に、彼の愛玩動物に対する動物観について、特に開物学との関係を明らかにすることを目的とする。

松森胤保の動物の蒐集や飼育の記録については、磯野直秀による『両羽博物図譜』や『胡蝶録』、『家蔵五玩雑録』について取り上げた研究がある³⁾。本研究では、これらの研究をふまえ、彼の著作の中でも、開物学についての松森胤保の考えを記した『南郊開物径歴』第一冊における序文と、開物学における動物飼育について記した『南郊開物径歴』第四冊の「動物発見」部分、さらに、『百年間談』における松森胤保の愛玩動物飼育記録から、松森胤保の飼育動物に対する動物観について考察を行った。

2. 松森胤保の著作と動物飼育

2.1 蒐集の記録と蒐集の周辺

彼の著作において、動物飼育に関する記録は、『両羽博物図譜』や『大泉珍禽見聞雑誌』などの動物について記した記録のほかに、『家蔵五玩雑録』といった蒐集の記録、また『南郊開物径歴』などの開物学の記録にみることができる。いずれの飼育動物も、小鳥や観賞魚、小動物であり、養蜂に関する記事を除いて家畜の飼育に関する記録は少ない。松森胤保にとっての飼育動物は、そのほとんどが愛玩動物である。

動物の蒐集記録についてみると、松森胤保自身による自著の目録『南郊著述目録』（酒田市立図書館光丘文庫蔵）をみると、内書部の「物録類」に、彼の蒐集愛玩したもの（貨幣、植物、動物など）についての著作が9点記されている。その内、『畜養録』について、「此書は予が幼時より畜養せし諸動物の事を記せる所なり」とあることから、彼が明治7年頃に飼育していた愛玩動物の記録であるといえる。また、『家蔵五玩雑録』については、「此書は予が手に付集合せん珍奇の物を記する所なり。五玩とは何ぞと言うに、則左に一に玉石とし、二に貝螺とし、三に植物、四に禽獣虫魚とし、五に精工の珍器とす。」とあり、鉱石や貝類を中心に蒐集を行っていたことがわかる。『家蔵五玩雑録』については、序文が慶應2年（1866）に記されており、執筆はそれ以降になるが、幼い頃から明治12年（1879）までの蒐集物について、いつ、どこで、だれと採集したか、またはだれから貰ったのかという情報が記されており、近世から近代にかけての庄内地方における、ものの蒐集記録として貴重な記録である。

ほかにも、『南郊著述目録』には記載されないが、松森胤保の自然物の蒐集記録としては、磯野（1989）において、日本最古の昆虫採集記録と評価されている『胡蝶録』がある⁴⁾。『胡蝶録』は、明治14年（1881）5月11日にはじめてチョウを採集し、その収集記録をまとめた採集記録である。また、大泉地方の鳥類についてまとめた『大泉珍禽見聞雑誌』にも、どこで捕まえたか、誰から貰ったか、などの個体の収集経緯の情報が記されており、松森胤保の記録からは、およそのものについて、ものの収集経緯まで追うことができる。

松森胤保の親兄弟、子供たちもまた、愛玩と蒐集を好んでいたことが、家譜である『長坂氏略世家』や『百年間談』にみえる。『長坂氏略世家』によれば、父親の長坂右衛門治禮は、「閑に花草を弄し、幼い孫を愛して更に他求する所な

し」として、草花を愛好していた人物であった。また、胤保は六人兄弟の長男であったが、弟（六男）の六弥太は胤保とも採集によく外出したようで、『家蔵五玩雑録』には採集者としてその名前がみられる。さらに、息子の又次郎や昌三は父親同様に動物の飼育や植物を好んでいた。特に、次男の昌三は明治3年（1870）から明治14年（1881）ころまでの日記をのこしているが、その記録は釣りによって得た魚の記録に始まり、動物や植物、石器類の観察や蒐集、育成の記録となっている。

また、土器や石器の蒐集仲間である羽柴雄助や犬塚祐吉らもチョウの採集をともにする仲間であり、『家蔵五玩雑録』において胤保の親戚や知人が様々なものを土産とするように、庄内地方に収集を趣味とする人々が多かったことが指摘されている⁵⁾。胤保の周辺には蒐集の愛好者が多かったのである。このような中で情報を収集し、様々な動物を愛玩飼育していたのである。

2.2 蒐集と飼育の目的

松森胤保が集めて愛玩した動物は小鳥が多いが、それ以外にも、ネズミやフナ、色変わりのドジョウなども愛玩しており、愛玩と蒐集の記録が『両羽博物図譜』に一部紹介されている。小禽類を特に愛玩の対象としていたようで、明治14年に執筆された『大泉珍禽見聞雑誌』の序文において、以下のように記される。

予幼ナリシヨリ性深く鳥ヲ好ミ、之ヲ獵シ之ヲ育シ目鳥ヲ見ルコトアレハ常ニ神氣ノ爽快ナルコトヲ覺ユ、之ヲ見テタラス之カ形状色彩ヲ図シ、之カ羽毛嘴爪ヲ蔵シ、近時ニ至テハ其珍物ニ遇ヘハ全ク其皮ヲ剥テ之ヲ物ニ蒙ラシメ偶鳥ヲ作テ之ヲ弄フニ至ルト雖之ヲ好ムコト幼時ノ如ニハ非ス

幼いときより深く鳥を好み、狩猟によって捕獲し、また飼育愛玩の対象とすることで、「神氣の爽快なることを覚ゆ」としている。飼育するだけでなく、珍しい鳥類が手に入ると、それを剥製にして保存することも行っていた。

また、鳥類の飼育について、松森胤保は以下の3つの種類があることを述べる。『両羽禽類図譜』「論説」の「第七章養鳥法略」においては、「鳥を養う三情」として①口養、②目養、③耳養の三つの飼育態度があると述べている。「鳥を

養う三情」は、それぞれ愛玩の対象も異なっている。口養はニワトリやアヒルであり、卵や肉を食べることを楽しむ。目養に適する鳥は「見鳥」であり、毛色や形状、挙動を見て楽しむヒワやヤマガラであるとしている。また、耳養に適する鳥はウグイスやウズラであり、鳴声を楽しむために愛玩する。口養は肉や卵を取って食用とする家禽の類であるが、目養と耳養は、鳥類の外見や囀りの美しさを目や耳で楽しむものであり、胤保が好んで集め、多く飼育していた種類も「見鳥」や「聞鳥」であった。彼は、鳥類を目と耳で愛玩し、楽しむことを目的に飼育していたといえる。

2.3 『百年間談』における動物飼育の実態

松森胤保は、実際にどのように動物を飼育愛玩していたのか、彼の個人的な記録からみていく。『百年間談』は、元治元年（1864）から明治8年（1875）ころまでに、彼個人や身の回りで起こった出来事についての記録をまとめた10冊の記録である。『南郊著述目録』には、「一身書類」（胤保一身上ニ止マル記録）に分類され、「此書ハ予カ履行ニ係ル談語ヲ記スルモノナリ、今九冊、元治元年十一月二十一日着手、今猶廢セス、身世記事成テ廢ス」とあり、彼個人にかかわる物語を記した著作である。九冊目と十冊目は『百年間談除条』として戊辰戦争時の戦場記録となっているが、巻一から巻八までは、個人的な出来事について、巻を追う毎に年を追った形式での記録で、84項目の記事が記載されている。

明治5年から7年ころにかけた出来事についての記録からなる巻七に「畜養の事」として、動物の飼育に関する記事が載せられている。「(七十七) 畜養の事 四事」は、幕末から明治初年にかけての動物飼育の記録であり、続く(七十八)は「花木珍樹愛翫の事」となり、動植物の愛玩に関する記事が二件続いている。

『百年間談』巻七「(七十七) 畜養の事」は、明治七年の秋に記されており、全て松山での出来事の記録である。小鳥の飼育、ハツカネズミの飼育、フナの飼育、養蜂の試みについての4つの項目からなる。

第一項目は、小鳥の愛玩についての記事である。胤保だけでなく、子の又次郎や昌三も小鳥を愛玩しており、当時は飼育動物の世話を彼に任せているが、多種類の小禽を20羽ほど飼育していた。本項目は、愛玩飼育していた蝦夷アト

リについての記事である。イタチに殺された悔しさから、そのアトリを図にして、また追悼詩を詠んでのこしたと記述しており、飼育している小鳥に対する愛玩意識をみることができる。

第二項目の内容は色変わりハツカネズミの産出の実験についてである。明治5年（1872）に白黒斑ネズミと白灰斑ネズミを東京より手に入れ、翌年には100匹ほどにも増えたが、特に珍しい毛色のものは産出されなかった。そこで、「人為を以て更に珍品を作らんと欲」して、黒色の純色種と灰色の純色種をつくり出そうと試みた。その結果、13種類の毛色のハツカネズミを産出した。明治7年現在の産出したネズミの毛色について記録しており、自ら実験によって奇品を造り出そうと試みた記録となっている。

奇品ネズミの産出についてまとめた記録は、本書以外にも、後述の『南郊開物径歴』と、『両羽獣類図譜』にみることができる。ほかに、日記にもネズミのかけあわせについての記事が確認される。『両羽獣類図譜』によれば、明治6年1月より8月の間に6種類の毛色の変ったネズミを得たが、純黒の個体を得ることが出来なかったために実験を終了したと記している。『百年間談』の記事は、『両羽獣類図譜』における実験記録の後にも行った実験の記録である。さらに、実験記録としてまとめたものが、後述する『南郊開物径歴』の「変色鼠人造法」の記事であると考えられる。

3. 開物学のなかでの愛玩動物

3.1 『南郊開物径歴』と『南郊意匠開物』

松森胤保は『南郊開物径歴』のような、機械の発明や実験の記録の中に、動物の飼育記録をのこしている。松森胤保が、動物を愛玩飼育することについて、対象を蒐集して愛でるだけではなく、開物学の一つとして珍しい動植物を蒐集し、飼育し、かけあわせの実験を行っていたことが、開物学についての著作『南郊開物径歴』にみることが出来る。

『南郊開物径歴』は安政4年（1857）から明治23年（1890）の間に記述された16冊に及ぶ機械の解説書であるが、彼が発明したり、実験したりした様々な機械や天文について詳細な図とともに紹介した記録である。『南郊著述目録』に記されない著作であるが、同じ年月日に記された序文をもつ『南郊意匠開物』4冊は、『目録』中には「工藝書類」に分類され、修正を加えて公開したい著作であるという印が付された著作

である。「此書は、魚鳥の獵具及び其他の百工器具等に至るまで百事予が意匠を以て得る所のものを往々記する所にして今猶稿を脱せざるものなり」と紹介されるように、彼自身が思考し、制作し、実験した機械類についての理論面での記録である。一方の、『南郊開物径歴』は、『南郊意匠開物』と同じ意図により作られた、彼自らが考案し、実験した機械についての図譜であるといえる。『南郊意匠開物』と『南郊開物径歴』の1冊目をそれぞれ比較すると、目録部分どちらも「自序」、「大綱」、「細目」、「凡例」、「年表」となっている。しかし、『南郊意匠開物』の「年表」の本文は白紙のままである。一方、『南郊開物径歴』は、「自序」部分に多数の修正が入っているほかは『南郊意匠開物』とほぼ同一の内容である。さらに、「年表」の本文は、万延2年(1861)から明治21年(1888)2月までに試みた実験についての目録となっている。以上の点から、『南郊開物径歴』の自序をもとにして書き改めたものが『南郊意匠開物』の自序となったと考えられる。

3.2 『南郊開物径歴』における「開物」

『南郊開物径歴』は、自序において、「人間ハ其智ヲ尽シ、意匠ヲ巡ラシ、以天工ノ物ト人工ノ器トヲ開キ、利用厚生ノ道ヲ務メテ、天理ヲ尽サスハアルヘカラサルヲ知ヘシ、」と、人間は智を尽くし、意匠を巡らして天工の物と人工の器とを開き、利用厚生に道にいたることで天理を尽くすべきであると説いている。そのために、「発見物」、「製造ノ事件」、「器物ノ工夫」など開物にかかわるものについて、100余りの記事を記した本書をまとめたとする。多くの実験や発明をしたことについては、いつの日か、一つは自分の利益のため、一つは公衆の利益のためにこれらの実験、発明した器機が用いられることを望むとしている。

続いて、以下に挙げる5つの願い志すことについて述べる。

- 一、文学に従事して、著述に専念すること、
- 二、家産を起こして、先人の末裔を盛んにし、国益をはかること、
- 三、内外を遊覧して知見を博くすること、
- 四、要職につき、偉功を立て、大名を挙げる
こと、
- 五、閑に動植物の採集や飼育を行い、土器等の蒐集を楽しむこと、

彼の5つの願いは、知見を博くし、家業を興し、偉功をたてることである。また、自序の終わりには、偉功を立て大名を立てるものは未曾有の利益をつくり、世を助けるとしているが、彼自身はそうすることができなかつたことを嘆いている。彼が行いたかつたことの一つに、動物飼育が含まれているが、松森胤保は動物飼育や植物の栽培、古物の蒐集を自身の好みとして楽しむ一方、この行為についても前に述べる四つの志と同様に、人々の生活の向上のためになるものと考えたい部分があつたと考えられる。

続く凡例によれば、開物とは、自然物、人工物を問わず、未だ人間世界に現出しないものを初めて発見したり、世に出したりすることである。最初は自然物を発見することを志していたが、後には織機など、役立つものを発明することを主とするようになったとしている。『南郊開物径歴』16冊も、その主な部分は機械類の発明や実験の記録にあてられている。また、凡例には、開物の分類として、「発見開物」、「法方開物」、「器械開物」の三種類があるとする。「発見開物」とは、自然物の発見に対して、有益な物品の発見は「物品の発見」とし、有益な物品が産出する産地を発見することを「産地の発見」としている。「法方開物」とは、有益な小禽を養うための餌の作り方などの方法についてであり、「器械開物」とは、便利な機械を工夫して発明することであるとする。

新しいものを発見し、また、機械の実験や製作を試みて、生活に役立つ機械を発明することは、利用厚生のため、人がなすべき行為であると、松森胤保は考えていた。

3.3 「動物発見」と動物飼育

『南郊開物径歴』第四冊の表紙は、「天造物品」という見出しと「礦物発見」「植物発見」「動物発見」という細目となっており動植物の発見に関する一冊となっている。動物を捕らえる方法、さらに奇品の産出もまた、「開物」としている。彼にとっての動物飼育は、動物を好んで愛玩することに留まらず、開物学にかかわる「発見」という行為であつたといえる。

『南郊開物径歴』第四冊の内題は「南郊意匠開物 法方發揮 天造物事」となっており、「天物発見」の中に礦物発見、植物発見、動物発見とそれぞれの小項目がある。しかし、第四冊中には、鉱物に関する記事はなく、植物と動物の

記事のみであり、その内容も目録とは異なっている。『南郊開物径歴』中には目録のみで本文の記されない鉱物に関する記事と、動物を捕らえる罠などの記事については『南郊意匠開物 三』の「天物発見」中にある。

『南郊開物径歴』「動物発見」の細目は以下の十項目となっているが、本文には、「鳶鼠」と「カケツ」の記事はなく、「イボ蠟」「蜂蜜及び黄蜂」は植物発見の記事中にみられる⁶⁾。

さらに、「動物発見」に関する本文中の記事は目録とは対応せず、「禽事」「獣事」「蟲事」「魚事」の四つの見出しが付いており、それぞれに、数点ずつの記事がある。何れも動物の飼育方法と分類方法であり、「動物発見」のそれぞれの記事は、松森胤保にとっての品種改良についての記録である。

鳥類についての記事を取り扱った「鳥事」には、「彪替雀獵獲法」「餌附ケ法方」「摺餌製造法方」「鶯雛ヲ親鳥ニ附ル法方」「鳥卵ノ中ヲ虚ニスル法方」の四項目が記される。それぞれ、目録の主題とはやや異なる表記であるが、目録通りの内容となっている。いずれも鳥の捕らえ方や、餌の作り方など、飼育するための方法についての記事となっており、「法方発見」に関する記事が集められている。

「彪替雀獵獲法」については、罠によるスズメの捕り方の説明であるが、珍種である白いスズメのみを選んで捕るための方法としている。鳥類捕獲の罠の作り方については、「發明狩獵器械」の部にその大部分を記しているが、これは製造法方ではなく、捕らえ方の方法を示すものであるため、ここに記したとしている。

「餌附ケ法方」「摺餌製造法方」「鶯雛を親鳥ニ附ル法方」は、野生の小鳥を人の手で飼育するための方法について、彼の考えを述べている。「鶯雛を親鳥ニ附ル法方」は理論のみであるが、他の2点はいずれも彼自身が、飼育のなかで考え、試みた結果が記されている。

「獣事」は「変色鼠人造法方」についてであり、色変わりネズミの産出方法についての記事である。『百年間談』にみられるネズミのかけあわせの実験について、それよりやや詳しく、かけあわせについて述べたものである。(図1)

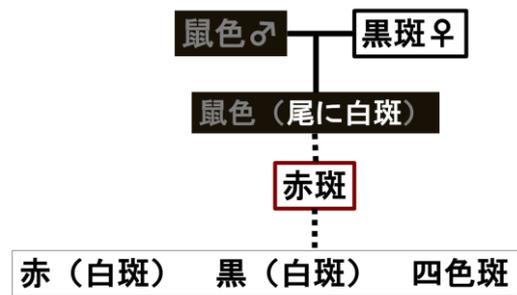


図1 「変色鼠人造法」におけるかけあわせの実験によって産出したネズミの毛色

また、16種類の斑ネズミをつくりだしたことについて、当時、東京で毛色変わりのウサギ愛玩飼育が流行していることを受けて、自ら産出した毛色変わりのネズミもまた、利益につながる可能性があることをほのめかしている。

『南郊開物径歴』第四冊「動物発見」は、未だ世に知られていない珍しい種類の動物を発見するための方法、発見した動物についてまとめている。自然物である動物を蒐集すること、そのなかでも特に、あまり見ることの出来ない珍しいものを捕獲や、育成の中で手に入れ、集めることが、松森胤保にとっての開物学としての一つの行為「動物発見」であった。さらに、手に入れた動物を長く飼育し楽しむための方法として、餌の作り方についても記録をのこしている。

4. 松森胤保の愛玩動物飼育

松森胤保にとって、愛玩動物を飼育することは、それ自体好む行為であったことは、「鳥を養う三情」や『百年間談』の記事、彼が飼育愛玩していた動物たちの種類や数の多さから読み取ることが出来る。鳥類を非常に好んでいたことは、多数の小鳥を飼育し、長く飼育するための方法を考え、実験することへとつながっていったと考えられる。しかし、彼の飼育行為は愛玩するための飼育にとどまらない。開物学についての著作である『南郊開物径歴』では、新しいものを発見し、また、機械の実験や製作を試みて、生活に役立つ機械を発明することは、利用厚生のため、人がなすべき行為であるとしていた。人間が生活を豊かにするため行うべき行為の記録のなかに、珍しい毛色や色変わりの動物を発見すること、そのための飼育方法や、かけあわせの実験を記録している。松森胤保にとって、開物学における動物の飼育という行為は、珍しいものを発見すると同時に、人の手を加え

て珍しいものを作り出す発明でもあった。松森胤保は、利用厚生のための手段として、珍しい動物を見つけ、人々に示すための動物飼育であると考えていたといえる。また、発見したもの、発明した方法については、詳細に記録することで後世にのこすことを意識していた。国を豊かにするための手段としての有益な動植物の発見と捕獲方法を考え、動物の飼育方法と飼育動物の種類を記録に残したと考えられる。

引用及び参考文献

- 1) 中村清二 (1947) 幕末明治の隠れたる科学者 松森胤保, 自文堂.
- 2) 松森胤保の生い立ちについては、松山町史下巻, pp.558-571. を参照した.
- 3) 磯野直秀 (1988) 鳥獣虫魚譜—「両羽博物図譜」の世界—, 八坂書房. 磯野直秀ほか (1989-1991) 『両羽博物図譜』の研究 1～6, 慶應義塾大学日吉紀要・自然科学, 6-10. など. また、彼の思想については、梶沼彩子 (2009) 松森胤保『止戈小義』考—序説・附翻刻—, 東北文化研究室紀要, 50, 19-34. がある.
- 4) 磯野直秀・田中誠 (1989) 『胡蝶録』—日本最古の蝶類採集日誌, 慶應義塾大学日吉紀要・自然科学, 6, 1-25.
- 5) 磯野・田中 (1989) 前掲, p21.
- 6) 「鴛鼠」と「カケツ」については、明治十四年の序文がある『大泉珍禽見聞雑誌』巻一「(廿九) 逆鳥 蝦夷ニテカケツと云」および、『両羽禽類図譜』鶏雉部において詳しい記述がある.

本研究で用いた松森胤保著作について、『南郊著述目録』、『南郊意匠開物』、『大泉珍禽見聞雑誌』、『両羽博物図譜』については、酒田市立図書館ホームページ「古文書画像検索」http://library.city.sakata.lg.jp/imgsrch/o_index.html を利用した。また、『百年間談』、『南郊開物径歴』、『家蔵五玩雑録』、『胡蝶録』、『日記』については、松森写真館所蔵資料を利用した。